

研究・調査報告書

報告書番号	担当
27	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and risk of bladder cancer in Los Angeles County. ロサンジェルス地域の飲酒量と膀胱がん	
執筆者	
Jiang X, Castelao JE, Groshen S, Cortessis VK, Ross RK, Conti DV, Gago-Dominguez M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Cancer. 2007 Aug 15;121(4):839-45.	
キーワード	
飲酒量、種類、膀胱がん、症例対照研究	
要旨	
<p>目的：</p> <p>アルコール飲料の膀胱がんへの影響は調査によって異なっており、明らかにされていない。したがって本研究では、飲酒量と膀胱がん、および飲酒量とその他の要因との相互作用を検討した。</p> <p>方法：</p> <p>ロサンジェルス地域で行われた地域住民を対象とした症例対照研究で、1586組の症例およびその対照者に面接調査を実施した。飲酒量ごとの膀胱がんリスクを算出し、それがアルコール飲料の種類によって異なるかを検討した。</p> <p>結果：</p> <p>膀胱がんのリスクは飲酒頻度や飲酒期間の上昇に応じて低下し (p for trend はそれぞれ、0.003, 0.017)、一日にエタノール換算で 60g 以上飲酒するものは非飲酒者と比較して 32%膀胱がんのリスクが低かった (オッズ比および 95%信頼区間は 0.68、0.52-0.90)。ビールとワインではそれぞれの飲酒量の上昇が膀胱がんリスクの低下と関連していたが (p for trend はそれぞれ、0.002, 0.054)、蒸留酒ではその関連を認めなかった。こうした飲酒量による膀胱がんリスク低減効果は、一日に 4 回以上排尿するもの、30 年未満の喫煙歴を有するものにおいて最も顕著であった (p for trend はそれぞれ、<0.0001, <0.0001)。</p> <p>結論：</p> <p>飲酒量の上昇は膀胱がんリスクの低下と関連し、この影響はアルコール飲料の種類、喫煙行動、排尿回数によって異なることが示された。</p>	